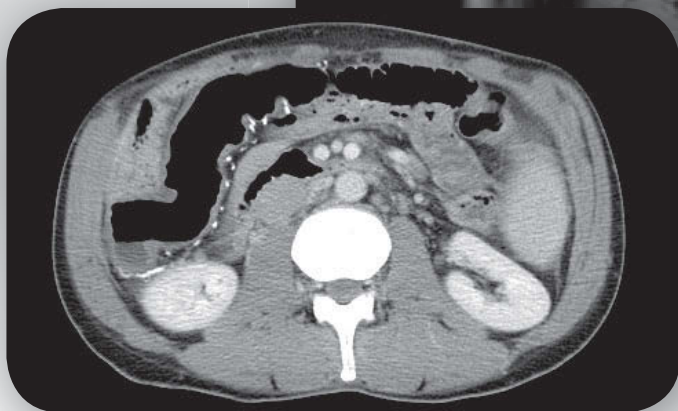
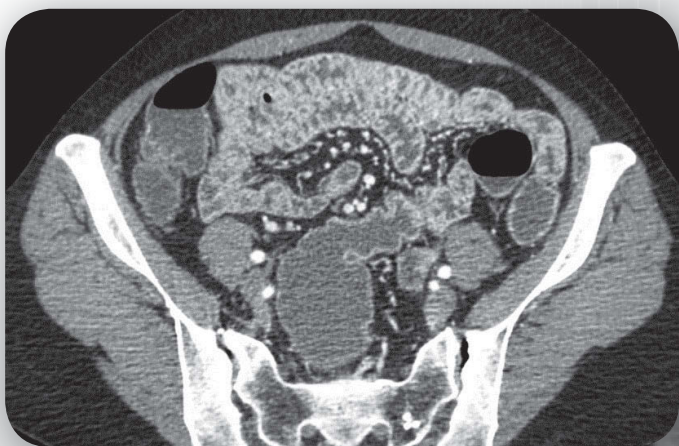


特集

さまざまな腸疾患



(写真：p1142, 1189, 1213より)

の画像診断

序説

消化管疾患に対する画像診断においては、バリウム検査の役割が内視鏡検査へ大きく移行した一方、CTやMRIに代表される断層画像検査が新たな役割を担う画像検査法として登場した。CTやMRIは、消化管の内腔や壁のみならず、腸間膜、腸間膜血管、腹膜、リンパ節、腹水など、バリウム検査や内視鏡検査では得られない情報を提供する。造影剤を使用することにより血流情報が得られる点や、内視鏡が到達困難な小腸が容易に画像化される点もCTやMRIの長所である。

CTやMRI、特に簡便かつ短時間で検査可能なCTは、消化管の解剖変異に起因する疾患、種々の救急疾患、炎症性疾患、感染症、医原性疾患などさまざまな腸疾患に広く適用され、高い診断能を示すとともに重要な役割を担う。しかし、得られる画像所見は必ずしも特異的ではなく、診断においては、臨床情報と複数の非特異的所見を総合的に考えて病態を解明することが求められる。

そこで、まずはじめに『CT所見からみる腸管の病態診断』(京都市立病院 谷掛雅人先生)にCTで得られるさまざまな画像所見(特異的所見、非特異的所見)のとらえ方や考え方について解説いただいた。各論では、最初に『消化管の正常解剖と異常』(東近江総合医療センター 井上明星先生)、『急性虫垂炎』(東京女子医科大学 春日紀子先生ら)や『憩室症・Meckel憩室』(北里大学 ウッドハムス玲子先生)といった、基本的な解剖知識と日常よく遭遇する疾患に関するCT診断について解説いただいた。また、『Crohn病』(滋賀医科大学 辻川知之先生ら)については、バリウム検査に代わるCT、MR検査について内科医の立場から執筆いただいた。さらに、やや疾患頻度が下がるが『感染性腸炎』(公立甲賀病院 井本勝治先生ら)、『まれな虚血性腸疾患』(東京大学 中井雄大先生ら)、また、医療行為にかかわる腸疾患として『術後に特有の腸閉塞疾患』(東京医科歯科大学 山下 航先生)と『薬剤起因性腸炎』(昭和大学 田中絵里子先生ら)を取り上げ解説いただいた。

ご多忙のなか、執筆を快諾いただいた著者の先生方には、この場を借りて深謝申しあげる。

本特集号では、消化管疾患に対するCTを中心とする断層画像診断について、画像所見の拾い上げと考え方、消化管の解剖、さらに、まれではあるが画像診断医がおさえておかねばならない疾患を含めたさまざまな消化管疾患を取り上げた。本特集が、若手医師ならびに、臨床に携わる多くの診断医の日常診療の一助になることを祈念する。

古川 顕